

樹病ウォッチング ()

—— 病原菌による樹木の奇形 ——

秋 本 正 信

樹木が病気にかかると、やがて葉や枝が枯れたり、ときには全身が枯死したりする。普通は、このような末期症状になってから、病気の発生に気づくことが多いのではないだろうか。しかし、それまでの過程で、樹木は病原菌の侵入に対してさまざまな反応を示している。なかには、病原菌が分泌する植物ホルモンによって、葉や枝が異常に肥大したり、ねじれたりすることがある。このような目立ちやすい症状でも、案外見過ごされていることが多いようだ。

今回は、このような樹木の奇形を、葉、果実、枝について一例ずつ紹介しよう。

ツツジ類のもち病

ツツジ類は、北海道で最も好まれる花木の一つである。このことは、道内で約60の自治体が市町村の花として指定していることからもうかがえる。なかでも、エゾムラサキツツジはその代表的なものの一つだろう。

昨年7月初め、北海道立林業試験場道北支場構内に植えられているエゾムラサキツツジの若い葉に、丸くて淡い黄緑色をしたものがくっついているのに気づいた。これは、やや光沢をもち、よくみると若い葉や枝の一部が変形してふくらんだものだとわかった。「もち(餅)病」である。なるほど、もちがくっついているようにも見える。このふくらみは、肉質で、袋状になっており、やがて、ピンク色～紅色を帯びてくる(写真-1)。表面はのちに白い粉をふいたようになるが、これは病原菌の胞子が形成されたためである。

まゆ玉をつけたようにも見えるこの病気は、それなりに趣があり、鑑賞価値もないとはいえない。ツツジ類は庭先、公園など、身近に多いはず。一見をおすすめしたい。

スモモのふくろみ病

5月末の道北地方。真っ白な花をびっしりつけた黒っぽい木が離農跡地によく見られ、人目をひいている。スモモである。かつては、農家の庭先によく植えられたらしい。

花が終わると、やがて丸くてつややかな緑色の実がつく。初めは葉の色とよく似ているのであまり目立たないが、よく見ると、どうも妙な形の実が混じっていることがある。ふくらんでいびつになったものや、細長くて少し平べったくなったものが見える。このような実には、やがて病原菌の胞子が形成され、表面が白い粉をふいたようになる(写真-2)。これがスモモの「ふくろみ病」である。実が袋状に変形するのでこの病名がある。この病気はスモモのほか、ウメ、アンズにも発生する。

ミヤマザクラのふくろみ病

北海道の花見の対象といえば、普通はエゾヤマザクラであり、この花はピンク色である。ミヤマザクラは、別名シロザクラともいい、純白の花をつける。開花時期がエゾヤマザクラより2週間ほど遅いので、それほど寒い思いをしないで花見ができる。

花が終わると枝がいつせいに伸び始め、若葉の季節になる。ところが、伸び盛りの枝のなかには、時々、奇妙な形をしたものがみられる。あるものは薄紅色に肥大して重そうに垂れ下がり、あるものはとぐろをまいたようにねじれている（写真 - 3）。これは、病原菌によって若い枝が変形したものであり、枝ぶくれ病とも呼ぶのがふさわしい症状である。しかし、この病原菌がふくろみ症状を越えることもあるので、「ふくろみ病」の病名がある。

病原菌は、スモモのふくろみ病菌と同じ仲間（属）であるが別種である。この病気は、マメザクラ、ニワザクラにも発生するが、北海道でいちばん身近なエゾヤマザクラではまだ見つかっていない。

写真 - 1 エゾムラサキツジ
もち病

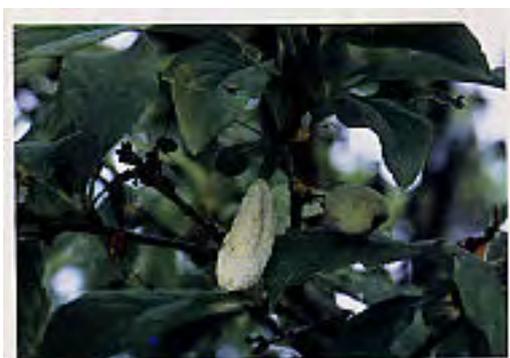


写真 - 2 スモモふくろみ病

写真 - 3 ミヤマザクラふくろ
み病

